

第2部

ドラマ・バラエティ制作者 グループインタビュー ~いま、制作現場で思うこと~



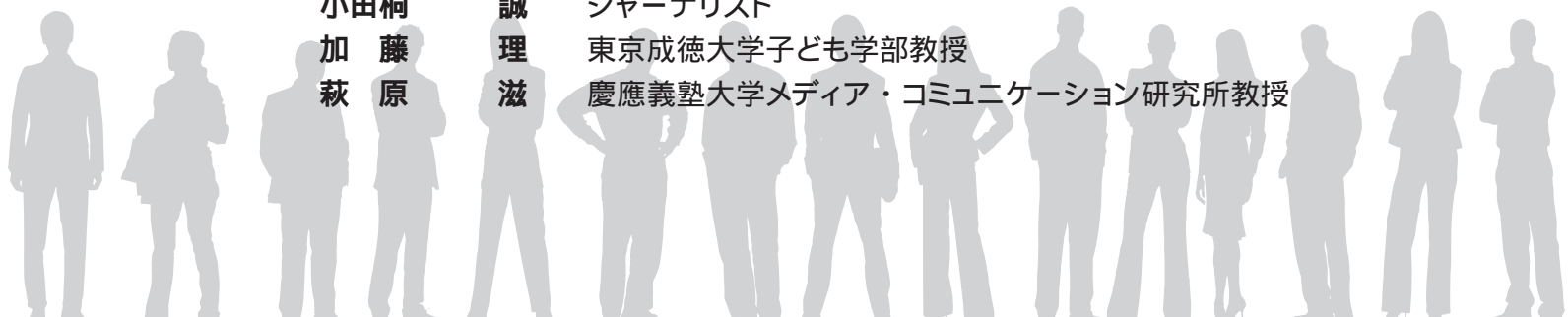
出席者

(敬称略)

堀之内 礼二郎	NHK 制作局 第2制作センター ドラマ番組部
安島 隆	日本テレビ 制作局 バラエティーセンター
大江 達樹	テレビ朝日 編成制作局 制作2部 兼 編成部 総合戦略班
中井 芳彦	TBSテレビ 編成制作局 制作センター ドラマ制作部
渡辺 大樹	テレビ東京 制作局 CP制作チーム
小仲 正重	フジテレビ 編成制作局 バラエティ制作センター

青少年委員会出席委員

小田桐 誠	ジャーナリスト
加藤 理	東京成徳大学子ども学部教授
萩原 滋	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授



—今の制作現場の雰囲気はどんなものなのか、今日は制作現場の方6人にお集まりいただき、生の声をうかがっていきたくと思います。まず、自己紹介を兼ねて担当している番組をお願いします。

中井 TBSドラマ制作の中井芳彦と申します。2003年にTBSに入社しまして、最初2年間のバラエティ配属を経て、ドラマ制作へ移りました。2010年4月放送『新参者』、2011年『JIN-仁-』で協力プロデューサーとして参加しました。

安島 日本テレビの安島隆です。1996年に入社しまして、基本的にバラエティをずっとやっています。人事異動で人事とか編成にいったことがあります。いま僕はちょうど番組が終わってしまって、自分の番組がないという“楽”っていか地獄みたいな(笑)毎日を送っています。それまで『コレってアリですか?』と『バカなフリして聞いてみた』の2番組の演出をやっていたんですけども、両方とも9月に終わってしまったので。頑張っって新しい企画を立ち上げようというのが今の状況です。

小仲 安島さんとたぶん同期の96年にフジテレビに入社して、ずっとバラエティを15年間やっている小仲正重です。今は水曜日深夜の『なかよしテレビ』っていう番組の演出と、初めてプロデューサーも兼ねてやっています。あとは年末に向けて『THE MANZAI 2011』の演出も兼務しています。

—やはり深夜枠の方はいろいろ実験というか冒険とか、自由に制作できる場所ですか。

小仲 そうですね、いやもうちょっと早い時間帯でやりたかったんですけど、そっちの枠がなくて、それと深夜枠だとお金が全然ないというか、それともうちょっと休みが欲しいなどは思うんですけど、まあしょうがないかと思いつながら、やっています。

大江 テレビ朝日の大江達樹です。僕は97年に入社して、最初はバラエティに配属になって、そこからドラマとバラエティを行ったり来たりして15年ばかり制作現場にいます。トータルで言うと、ちょっとバラエティの方が長いですかね。バラエティでは、主にディレクターをやっていて、一番長かったのが『SmaSTATION!!』で4年ほどやっていました。3年半くらい前にドラマに戻ってからは、ずっとプロデューサーをやっています。担当してきた番組は『金曜ナイトドラマ』という金曜夜11時の枠が多くて、今年に入ってから『バーテンダー』、『犬を飼うということ』、『ジウ〜警視庁特殊犯捜査係』を3クール連続でやっていました。連続ドラマの場合は放送も3ヶ月で終わるので、必ず充電期間というか企画を考える期間が本来ならあるんですが、逆に3クール連続でやるという方が珍しいことです。うーん、今年はほんとに、あれ、これ言っているのかな(笑)。それこそ、ほんとに1月2日から9月末まで一日も休みなく働き、それが一段落着いたら、急に10月期から4月期のラインナップを見たら自分の名前がどこにも載ってなく、干されているのかなと思って(笑)。やっぱり仕事がない時期のほうが結構つらいというか、これは来年異動かなとか思って、そのプレッシャーで休めないっていうか(笑)。そういう感じの日々を過ごしています。

—ずっと自転車をこぎ続けていないと、もしかすると異動という心配があるのですか。

大江 そうですね。僕の場合はバラエティ希望で入社したんですが、最初にドラマに異動した時からドラマに魅せられてしまい、バラエティに戻された後もずっと「ドラマに戻りたい」という希望を何年も出し続けて、やっと念願かなってドラマに戻ってこれたので、他の部署に行かされるのはちょっと本意ではありませんね。あと、今年の4月から編成部の総合戦略班という新しい班の兼務をしています。

—総合戦略班というと、やっぱりセールスプロモーションというか、広告外収入を生み出そうってということなんですか。

大江 そうですね。編成部専任の人たちのほかに、映画、バラエティ、ドラマ、スポーツ、報道情報とか各現場のプロデューサーが2名ずつぐらい入って、新しいビジネスプランを考える会議を毎週やっている部署なんですけど、既存のコンテンツビジネスの部署ではなく、現場にいる人からは、今までと違ったアイデアが生まれるんじゃないか、また、企画の具体性や実現へのスピード感という現場の強みを生かせるんじゃないかという発想で選抜されています。内容はもう本当に多岐にわたっていて、やっぱりドラマだけやっているところだけの狭い世界での仕事になりがちなんですけど、その班に行くと「あ、会社ってこういうことで動いているんだ」「こういうことからお金を見つけてくるんだな」みたいな…。営業出身者の意見とかも聞けると、ドラマ制作とは違って、テレビというのが「広告収入だけじゃなくて、今後いかに」といういろんなアイデアが聞けるので、自分のためにも有意義だと思っています。



大江 達樹

テレビ朝日 1971年生まれ
主な担当番組『熱海の捜査官』『バーテンダー』『犬を飼うということ』『ジウ〜警視庁特殊犯捜査係』
これまでの担当番組『Sma STATION!!』

渡辺 テレビ東京の渡辺大樹といいます。99年入社で、入社以来制作局というところに入らして、特にジャンル分けはなかったんですが、『演歌の花道』とかモーニング娘。の番組とかをやっていました。その後3年間営業に行きまして、また制作局に戻り金曜日の午後9時にやっている『所さんのそのころ！』のディレクターをやったり、あとは期首期末の特番のプロデューサーをしたり、という状況ですね。8年間制作にいて、その後3年間営業に行っていたんですが、戻ってきたらすごい景気が悪くなってしまっていて。以前はロケするときもみっちりロケハンをやってからロケしていたのが、今はロケの前日に入って撮るといふか、ロケハンする時間もなくて、事前にインターネットを使っていろいろ調べたりしてとか、昔ほどロケとか収録が楽しいものではなくなってきているかなと思います。結構ADさんたちも疲弊している感じがあって、2000年ころのバブル期とかにはかなわないと思うんですけど、なんかすごく楽しいものをワーッと作っている感じが今はちょっと薄いかなって感じがします。端的に言うと制作費も少なくなって人も少なくなって、また、同じような番組が増えてきているところもあるかと思うので、そこでの差別化にやっぱり疲弊してしまっているのかなって思いますけど。

堀之内 NHKの堀之内礼二郎です。2003年入社です。NHKでは、入局したら基本的に地

方局に赴任するんですが、僕は福井放送局に行ってそこで4年間働きました。そこで、ニュースリポートやドキュメンタリー、スポーツ中継、バラエティ、歌番組など、あらゆる種類の番組を一通り経験してから東京のドラマ部に異動しました。ドラマ部に来て5年弱で、担当してきた番組は『天地人』、『ゲゲゲの女房』、『坂の上の雲』などです。今は4月から放送の連続テレビ小説『梅ちゃん先生』を担当しています。初めは演出部で走り回っていましたが、今はプロデューサーを志向しています。

—地方局ではドラマは作りづらいですね。

堀之内 そうですね、ドラマは入ったときから希望していましたが、とりあえず地方局に行って色々番組を作ってみたいという思いがあり、実際ドラマに来た今でも、福井で仕事をしたことは非常にいい経験になったと思います。福井時代のドラマの経験としては、ちょうど志望を固める4年目に、『ちりとてちん』という福井がご当地の朝ドラのロケがやってきて、それに少しだけ参加させてもらえたのが大きかったです。

—そこでドラマで使えるんじゃないかみたいな判断も上の方ではあったんですか。

堀之内 その時は顔を覚えてもらった程度だと思います。ここ数年はそうでもないんですが、当時うちの局ではそんなにドラマの人气が高なくて。というのも、他の部署では地方局から東京に行けば、基本的には一人前のディレクターとして番組やコーナーを任せられるのに、ドラマでは東京にきたらまた一からドラマのことを覚えていかないとはいけませんから。そんな中でも希望していたので、それならってことで呼んでもらえたんじゃないかなと思います。

—ここからはフランクにいろいろ聞いていきたいんですが、先ほど大江さんからはなかなか休み取れないという話がありましたし、渡辺さんからは以前はしっかりロケハンをしていたが、今はそんな余裕もなくなって次々と仕事をこなしていきなかならないという状況だということですが。

渡辺 そうですね、ただまあ入社10年以上の年代になると、あんまり振り回されて忙しいというような感じはなくなってくるので、休みがないことはないんですけども、精神的に参ったりするようなレベルではないと思います。でも、若い子は大変そうな感じがしますね、自分たちの時代よりは、作業が増えていて休日も少ないだろうし。

—ドラマでオンとオフの使い分けというか、オフには芝居に行ったり趣味を生かしたりする時間はあるんでしょうか。

中井 オンオフは大事だという意識はあるかもしれませんが。それは僕らが会社に入ったときはすでに、あまり会社にいないで早く帰ろうという雰囲気が確かにありました。昔は、結構ずっと会社にいたりすることが多かったと先輩から聞かされます。今は、比較的タクシーも使わないで帰れる時間に帰ろう、明日の朝来て仕事やろうと言われる感じはあったりします。

—安島さんも領いていましたけど、その辺りどうなんですか。

安島 どうですかね。僕は結構その人の仕事のやり方というか、僕は自分ですごいダメだ

など思うのは、自分が切り換えられないので。だから切り換えて、それこそ芝居や映画を観に行ったり、人と話したりした方がそのあとにつながるってことなのかなと思いつつも、例えば 3 時間あったら、ちょっと企画を詰めようかな、みたいになっちゃうので。やっぱり頭のどこかでずっとテレビのこと考え続けていますね。

小仲 まずスタッフがいろんな番組掛け持ちしているってことが忙しさの一つの原因なのかと。あとお金がないっていうのがすごく大きくて。ロケに行くのでも、昔は技術クルーを発注して「こう撮ってよ」っていう感じだったんですけど、今は「できるだけデジカメ借りて自分たち制作で撮ろう」ってなると、そのメンテナンスとか、照明とかもやったりとかしなきゃいけない、撮影後はパソコンで編集してとか、どこまでが制作の仕事なのかというのが際限なく広がってきていて、自分の時間はすごく減ってきていると思いますね。だから、よけい充電しなきゃいけないっていう感覚を僕は持っているんですけど。ただ、やっぱり掛け持ちが非常に多いです、やっぱり充電期間がないのもうしょうがないと。だから結局、自分のやりたい笑いやなら笑いを貫こうと。ちっちゃい頃見た、ドリフターズのこういうコントや笑いが好きだっていうのはあるんですが、ただ今さらそれを見て何かを勉強するといっても何も変わらないだろうなって思いもあって。無いなら無いで自分の思っている面白さとかを貫くのでいいんじゃないかっていう割り切りを最近していますね。

大江 ドラマの場合、連続ドラマに入っちゃうと、なかなか舞台や映画を見に行く時間は取れないですね。撮影に入ると、毎日朝から深夜まで撮影をしていて、ちょっとでも時間が空いたら「じゃあ現場行く」っていうことになり、もうほんとに全部埋まっちゃう。逆に、連ドラが終わって何も担当してない期間に、まとめて映画とか舞台とか、今までずっと延び延びになっていた会食とかも、立て続けに入れるようにしています。でも、やっぱり最近のドラマは原作ものとかが多いので、人気ある原作は取り合いみたいなどころもあって、ちょっと出版社と話していないと、前から話していた原作がもうどこか他局に決まったりすることがあるので、上司には連投する弊害を訴えているんですが、「それはお前のキャパが足りないからだろう」って言われて終わるんですけど（笑）。

1 尊敬すべき先輩像

—皆さんの局には目指すべき先輩や、目標とする制作者はいらっしゃるんですか。

大江 今年、『犬を飼うということ』と『ジウ』で、2 本連続で一緒にやらせてもらった上司で内山聖子ゼネラルプロデューサーという女性がいますが、彼女は常に先々の企画を含めると 5~6 本掛け持ちしていますね。多い時はスペシャルドラマなどを入れると 10 本以上やっていたっていいですからね。本当に、よくいろんな番組の切り替えができるもんだなあと、それをこなしていくのを見ていると、なりたいたいというよりは「凄いなあ」と思いますけどね。ちょっと僕にはとてもできない。

小仲 僕の場合は、『めっちゃ2イケてるッ!』をやっている片岡飛鳥さんですかね。片岡さんは『めっちゃイケ』のずっと演出をやっていたんですけど、1年ぐらい前かな、部長になって、それまで「ほとんど顔見たことがない」という人がほとんどだったんですけど(笑)。自分のなんか城みたいのがあってそこに籠もっていて、誰も顔見たことがなくて、僕も十何年やっても1回ぐらいしか見たことないという人が部長になったんですが。すごくなんでいうんでしょう、演出の方法論というものをものすごく確立していて、理論がほんとにしっかりしているの。その人がすごくいろんな番組にアドバイスしてくれるので、部長になってから僕はすごく深く接しているんですけど。普通は自分の技は隠しておきたいと思いますが、いろんなノウハウとかも全部出してくれるんで、そこはもう15年やっていますけどすごく勉強になります。あと、結構フジテレビにはそういう面倒見のいい先輩がいて、「あそこはああしたほうがいいんじゃない」とかって言ってくれる人が多いんで、目指すべき人、尊敬する人はすごくいますね。

安島 日本テレビにはフジテレビさんとトップを巡って闘った頃からの第一線のすごいクリエイターがたくさんいます。例えば五味一男さん、吉川圭三さん、菅賢治さん、雨宮秀彦さん、土屋敏男さんなど…そのうちの吉川圭三さんというのは、今、制作局でエグゼクティブプロデューサーをやられているんですけど、その時に作った『世界まる見え!テレビ特捜部』とか『1億人の大質問!?笑ってコラえて!』、『踊る!さんま御殿!!』、そういう番組がいまだに日本テレビの屋台骨を支えている、「100年続くんじゃないか」っていう(笑)。一個刻むものを作った先輩方がやっぱりいらっしゃるので、それはもう単純に尊敬するし、そうなりたいなあと思いますよね。—まだその先輩方がバンバン引っ張って頑張っているっていう感じなんです。

安島 ええ。例えば菅さんは、さんまさんなどいわゆる大きいタレントさんとやっているプロデューサーですが、それを下の人間に継承するというのもされ始めていますし、そういうことをやりながらやっぱりいまだにVTRを見てらっしゃいますね、ずっと。だから、現場感がある感じですかね。

—それは、日本テレビのバラエティ作品にとってはいいいことなんですか。

安島 いいことだと思うんですね、やっぱり。お手本があったほうがいいかなと。五味さんはテレビの方法論を変えた方ですし、雨宮さんも『伊東家の食卓』で裏技という発明をされた。土屋さんは『電波少年』でほぼ無名の人を追いかけてドラマを生むという、みんなと違う方法論で作ってこられた。そういう先輩方の方法論があった上で、そこを継承していくというやり方もあるし、そことは一切違うんだというスタンスも初めて生まれますからね。

中井 『JIN-仁-』の石丸彰彦プロデューサーと一緒にやってみて、ここまでテレビに対



安島 隆

日本テレビ 1973年生まれ
企画演出した番組『コレって
アリですか?』『パカなフリし
て聞いてみた』『潜在異色』
『ぜんぶウソ』『落下女』

して熱くなれる人がいるんだなと思うと、やっぱり「いい会社入ったな」と思いました。テレビの仕事ってあんまり若い人にはもう人気がないのかも分からないですけど、僕らとしては、その危機感がベースとしてある上で入っていますから。まだまだテレビでやりたいことがいっぱいあるし、やらなければいけないとも思っているんで、すごい勉強になるし。もちろん他局でも、ドラマに限らずバラエティや報道、新しい発見ばかりだし、ほんと勉強させてもらっています。

—堀之内さんいかがですか。NHKでは『大河ドラマ』とか朝の『連続テレビ小説』とか、名だたる人がいろいろ作ってきていますよね。

堀之内 ディレクターのすごさって、すごく分かりやすいと思うんですよね。見て面白いかどうか、というところで判断できるので。内部的な目線で見ても、台本よりも物語の世界が豊かに描かれたり、現場で役者のいい芝居を引き出したたりするところをみて「ああ、すごいな」と思うことは多々あります。ただ、プロデューサーの場合、ヒットしたかどうかということが評価の指標になるとは思うんですが、それが全てなのかなという疑問も感じています。当たるかどうかは水物の部分があると思うので、当たれば実力、とも言い切れないのかなと思います。ただ、この間、日本テレビの五味プロデューサーの講演を聴く機会があったんですけど、やっぱり仕事に取り組む姿勢がすごいんですよね。家でいくつもHDレコーダーを持っていて、全部のチャンネルを全部録画して、10倍速ぐらいで全部見るっていう風におっしゃっていて。「一流のプロデューサーはここまでしているのか」と、ただただびっくりしました。

—堀之内さんの場合、プロデューサーを志向されているということですが、ディレクターよりどんなところが魅力ですか。

堀之内 ほとんどゼロから生み出せるってところですね。企画から放送、その後まで、全てに関われるというのがプロデューサーのやりがいがあるところだと思います。あとは、うちの局では、ディレクターをある程度までやってからプロデューサーになったという人がほとんどなんです。なので、民放さんみたいに、早い時期からプロデューサーを目指してその道を極めていくことができれば、大きな組織の中でも自分の色を持つことができるんじゃないかと思って、比較的早いうちからプロデューサー志向を表明しています。

—中井さんはどうですか。

中井 連ドラだと全話通じて同じディレクターが撮ることはほとんどないわけですから、その意味でプロデューサーは全話関われるし、そういう立ち位置で仕事してみたいと思ったからです。あと他局も含めてほかのドラマプロデューサーの話とか、そういう先人たちの作品や宣伝のやり方なんかを見ると、それぞれ皆さん、面白いことを考えるなっていうのはすごいと感じます。その辺りがプロデューサーの醍醐味のような気がしますし。

—皆さんどうなんですか。違う局のディレクターなりプロデューサーと話すことはあるんでしょうか。

大江 仕事の的には制作会社とか、あとはタレント事務所の方、どこまでが仕事でどこから

がプライベートか分からないところもあるんですけど、仕事の一環としてやっぱり定期的にいろいろな人と話をすると、いろんな情報が入ってきたりとか、そこから企画につながったりすることもあるし、それは対作家さんとかもそうですね。で、テレビ朝日内でいうと、定期的に会っているのは、同じ部署以外では同期が多いですかね。個人差があると思いますが、僕は他局にも、何人か交遊がある人はいますね。でも、それは仕事ではなくて、ほとんど友だちみたいなのところもあったりして、ここにいる中井君とも飲んだことがありますけど。

—そうなんですか。

大江 ええ。その時は僕が以前ご一緒したフリーの監督に呼ばれて行って、中井君も彼に呼ばれて、そこで初めてお会いして、「はじめまして」みたいな事はたまにありますけどね。そこでは、業界の話もあれば、ほんとにバカ話もあれば、いろいろとお互いの会社の愚痴を言い合うみたいなのところが多いですかね（笑）。

2 私はだからテレビをめざした

—ところで、今回の調査で「いつぐらいからテレビ局への就職を考えたか」、「就職のために準備をしたか」などを聞いたんですが、割とはっきり答えが出ているのが 20 代の人たちで、ずいぶん早い時期から就職の準備でセミナーに行ったりインターンを受けたり放送局を見学に行ったりとかしているようですが、皆さんの場合と比較してずいぶん違っていると感じますか。

堀之内 上の世代の方のことは分かりませんが、自分が会って話をした限りでは、下の世代でも昔からテレビが好きだったりとか、よくテレビ見ていたなと思う人が多いですね。逆にこっちがあ然とするぐらいよく知っていたりとか、若いのにしっかりしているなって思うことが結構多いです。「自分よりもテレビ好きかも…」と思ってしまう若手に会うことが割とあります。

安島 テレビが好きかどうかということでは、好きな人しかいないんじゃないかと思っているので、僕らは。僕は 38 歳ですけど、僕らが入ったころと今の 20 代の子も、同じようにテレビが好きなんじゃないかなとは思っています。僕らの世代と 20 代との差異っていうのは、ちょっと感じないですけど。

—ただ、若い人は早い頃から放送局に就職しようと思って準備をたくさんしている感じがあるんですよね。大学時代からいろんな所へ行ったりして。

安島 どうもそれは、あまり根拠はありませんが、僕らの頃はもうほんとに最後のバブル期で、50 人ぐらい内定者がいたんです。でも、今はギュッと締められていますから。そうすると当然対策もするでしょうし、まあ個人によるかもしれないんですけど、そんなに対策をするようなイメージは、僕個人としてはなかったですね。

小仲 僕自身の話で言うと、やっぱり小学生の時に『オレたちひょうきん族』を見て面白

いと思ったのと同時に、そこで働きたいという意識があつて。特にフジテレビに入りたいとかどこの局に入りたいっていうより、こういう現場で働きたいとか、こういうものを作りたいという意識でした。もしかしたらだいたいそこから年次が進んで、テレビ局というのが割と収入がいいとか、今全然そうでもないかもしれないですけど（笑）。入ることによって生活の安定が得られるから、「高収入の企業だから高待遇の企業だから」というので、テレビの番組を作りたいというより、商社とかに入ると同じような感覚の人が多いいと思います。

—『ひょうきん族』を見ていて、「ああ、こんな現場で働きたい」という、どこの局でなきゃならないとかいうことではなかったということですか。

小仲 そうですね。あの雰囲気、何だろう、本当にタレントさんと芸人さんと仲良くやっていると。もちろん入ってみたらそれは全然楽しいことなんてほとんどなかったんですけど。しんどい作業が多い、まあ、そんな中でも笑いが取れたら満足すると言うか、充実するという生活の繰り返しで、辛さを忘れるんですけども。フジテレビで働きたいっていう感覚じゃなかったですね。

—テレビ局であればどこでもいいっていう感覚で就職される方が多いのか、あるいはこの局がいいというような感覚が強いのか、その辺りはいかがですか。

堀之内 そうですね。NHKには「NHKに入りたい」と思って入っている人が多いと思います。NHKはやっぱ少し特殊なので、例えば宇宙の科学をやりたいとか、ドキュメンタリーをやりたいとか、そういう理由で入ってくる人が多い。僕自身もやっぱりNHKに入りたいと思って就職活動をしていました。周りにも結構多いですね。

—あまり民放は意識していない。

堀之内 そうですね。もちろん民放さんも就職活動の時に受けたりはしていたんですけど、落ちました。両方受かっていたら迷ったかもしれないんですけど、基本的にはやっぱり「NHKに行きたい」と思っていましたね。ただ同期の仲間とかで、本当は民放に行きたかったのにNHKにしか受からなくて来たっていう人は、中身や志向がいい意味で周りから浮いていて、今のNHKにとって貴重な人材になっていると思います。

—では、民放にお勤めの方はNHKは視野に入っていたんですか。

安島 僕は小仲さんと多分ほとんど同じっていうか、僕はそれが『全員集合！』派だったんですけども。『ひょうきん族』に鞍替えて、また『加トケン』が始まって戻るみたいな（笑）。僕が小学生のときに、『全員集合！』が僕の田舎にもやって来て見に行ったんですよ。それでやっていた演目がいわゆる「志村後ろ！」でした。志村さんの後ろにお化けが出て、僕らが「後ろ、後ろ」って叫んで、志村さんが後ろ向くと、お化けが消えているっていうやつです。それを見たとき、僕は本当に恐かったし、めっちゃめっちゃ面白く感じた



小仲 正重

フジテレビ 1973年生まれ
現在の担当番組『なかよしテレビ』『ネプリーグ』『世界衝撃映像社』
これまでの担当番組『ワンナイ R&R』『ワールドダウンタウン』『チンパンニュースチャンネル』『コンバット』

んです。それが何でかなあと思い返すと、志村さんが振り返る前までの音楽と照明がとにかくおどろおどろしかった。そして振り返った瞬間にそれがカットアウトされて、笑いが生まれていた。そんなことが、生の舞台を見たことによって、いつもテレビで無意識に見ているよりも増幅されて感じられたんですね。当時、将来の夢は志村になることでしたが（笑）。あれは何でかなって両親に聞いたら、両親が「それはいわゆる裏方さんのおかげだ」と。じゃあ、僕は志村にはなれないけども裏方をやりたいなど。テレビでそういうものを裏方として一緒に演者さんと作っていききたいというのを思ったのが小学生とか、中学生ぐらいのことで。まあ、これ何回か今までに喋っているのを編集して、いい話にはなっていますけど（笑）。でも、本当にそれぐらいのもんです。だから局というよりも、そういうものを作りたいなどという。逆にそれしか、テレビしか分からなかったですし、テレビ局が一番身近だったんですね。

—安島さんは就職のとき NHK も視野に入っていたんですか。

安島 自分としてはもちろん嫌ではなかったのですが、試験の順番が NHK さんは最後のほうですね。

堀之内 そうですね。

—渡辺さんはどうですか。



渡辺 大樹

テレビ東京 1974 年生まれ
現在の担当番組『所さんの学校では教えてくれないそんなところ！』『お笑い名人寄席』
これまでの担当番組『演歌の花道』『MUSIX！』『TVチャンピオン』など

渡辺 そうですね、テレビはずっと子どもの頃から好きだったんですけど、皆さんの熱い魂とは反するんですけども、待遇のいいところに入りたくなっていうのがありました。入社試験を受けるときに 3 年遅れだった為、あんまり大手の企業とか受けられない中でいろいろ受けてテレビ東京が拾ってくれたので。テレビが第一志望ではなかったです。だから入社試験のときに「この番組を作りたいです」って言った覚えはないんですよね。ただ、何かちょっと丈夫そうだから「制作に行け」みたいな感じで行かされたのかなっていう。その後は、制作の人間として色々なテレビの番組を見ている中で、『水曜どうでしょう』とか見ると、「ああ、何かあの場にいたいなあ」と思えるような何かすごい、おカネかけている訳じゃないんですけど、「いい番組だな」と思って、「プロとしてやる以上はああいう番組を作りたいなあ」って。学生のとくと、会社に入ってから番組を見る目が変わりました。

子どもの頃からのテレビへの憧れとちょっと違う感じにはなっているんですけど。働きたかったかと言われると、そうじゃないかなって思います。

—テレビ東京のアンケートにはちょっと特徴的な点があって、今の民放の放送の現状に対して批判的というか、特にバラエティのやり方についてネガティブな評価をしていたり、将来に関して割と NHK に近いポジションにテレビ東京はいるんですけど、何か理由がありますか。

渡辺 NHK さんとの対比かどうか分からないんですけども、やっぱりこの民放 5 社の中

で収益とか、売上とかがやっぱりいちばん切羽詰まっています。僕らはフジテレビさんとかとは違って、視聴者の意見とかをものすごく気にして、他の局がやっていないところをやるということばかり考えているからでは。また、うちの局は高齢者とか子どもっていうイメージが強いのですが、最近子どもがテレビがそんなに好きじゃなくなっている傾向を感じるのです。それにBSが始まってそういうお年寄りの方たちが見るチャンネルの選択肢も増えてしまって、テレビ東京離れがちょっと進んでいる、その中でのアンケートだったので、それが結果になったんじゃないかなと思いますけれど。

—大江さんは、ご自分でテレビの仕事をやりたいと思ったのは、比較的早かったんですか。

大江 いや、僕も遅かったですね。というか、僕も大学に入ったときに将来は何やろうかなと思って、それで最初に興味を覚えたのはCMプランナーの仕事で、もともと何かアイデアを形にする仕事をしたいとは小学校の頃からずっと思っていたんです。それでCMプランナーの仕事の内容を知って、スポンサーのニーズとか、こういう商品をこういうターゲットに売りたいみたいなお題が出されて、それに対しての答えを考えて、CMの内容だったり、キャッチコピーを作ったり、そういうセールスの全部のプロモーションを考える、決して芸術作品を作るのではなく、制約がある中でオリジナリティをいかに出すか？というのが、逆に面白いなと思っていました。だから、大学1年のころまではずっと電通に行きたかったんですよ。それで大学3年のときにマスコミのゼミに入って、そこでテレビ局志望の人ももちろんいっぱいいて、そういう人たちと話をすることで、テレビも面白いかなと思って浮気心がちょっと芽生えて…（笑）。大学3年のときにフジテレビさんのバラエティプランナー大賞にゼミの班で応募して「バラエティ部門賞」っていうのをうちの班がもらったんですよ。今思えば、その受賞がきっかけでしたね。そのゼミの班からフジテレビに入ったメンバーもいますし、僕はテレ朝と某広告代理店から内定をもらったんですけど、親友がフジテレビに入ったということもあって、まあ同じ業界にいて、将来、表ウラで戦ったりしたら面白いかなと。でも結構悩みましたけどね。最後の最後まで広告代理店かテレビ局かっていうのはずっと悩んでいて、そのときにNHKは僕の視野には入っていませんでしたよ。受けるなら、民放か広告代理店。というのは、当時何か作ったものを視聴者に見てもらおうということが僕の中ですごくモチベーションになっていて、単純に民放の方が視聴率というものを意識して作れるんじゃないかなと思ったんですよ。そこにはやっぱり視聴率という客観的な物差しがあって、全然業界のことを知らないときだったので、常に視聴者目線で面白いものを追求できるのは民放なのかなと勝手に思っていて、それでNHKだけ受けませんでしたね。いま考えると非常に青臭いことですし、実際はNHKの方がある意味、ピュアに視聴者だけを向いて作れる側面もあるんじゃないか、という気がしてきました。

—中井さんはいかがですか。

中井 やっぱりテレビっ子だったので、小学校のときからテレビを見ていて、放送作家さんとか、特に“そーたに”さんとか平仮名で名前が出ていると、「何の人なんだろうか」とい

う興味があったんですね。『元気が出るテレビ！！』とか『ごっつええ感じ』、TBSだと『ガチンコ！』とか大好きだったので裏方で共通の方の名前を見つけると、何をやっているかは分からないんですけど面白いなあと。「この人たちがテレビ番組を考えて作っているんだ」というふうに思ったのが最初だと思います。

—ドラマとバラエティの担当者を比べると、ドラマの人たちの方が今のテレビの現状に対して少し批判的な結果がでていますが、テレビが今後どうなるかについて、ドラマをやっている方とバラエティをやっている方と何か違いがありますか。

大江 やっぱりいろいろ違いますよね。もちろん個人差はすごくあることなので、一概には言えないと思うんですけども、やっぱり同じディレクターでも、ドラマの監督はおっさんでもロマンチストが多いし、バラエティのディレクターはやっぱり笑いの求道者みたいな人が多い。バラエティの方は楽観的ということではないと思うんですけども、常日頃笑いを追求している人たちですし、ドラマの方は企画うんぬんの話になったとき、結構社会性のあるテーマとか題材とかが多かったりするんです。例えば、震災後のドラマは、震災前のドラマとどういうふうに違うものか、視聴者はどういうものを求めているかということは、ドラマの世界では常日頃議論されるテーマではあります。もちろん、バラエティも当然そういう側面はあると思うんですけど、震災前と震災後の笑いがそんなにすごく変わったかということは、僕もここ数年ドラマしかやっていないんで分からないんですけど、ドラマの方が常に社会の空気を考えて企画・立案をしているような気がしますね。

—調査の中で「テレビ局に就職するきっかけになった番組があるか」と質問しているんですが、先ほど『8時だヨ！全員集合』とか『オレたちひょうきん族』とか言われましたが、割とバラエティを見てテレビ局に入りたいと思った方は若い年代に多くて、40、50代になるとバラエティよりドラマのほうが多かったという結果が出ています。みなさんは、テレビ局に就職するときにドラマをやりたいとか、バラエティをやりたいと思って入ったのですか。

安島 基本的には明確だと思います。僕もいわゆる人事の面接官みたいなことをちょっとやりまして、それでまず最初に「テレビ局に入って何やりたいですか」って聞くと、「番組作りたいです」って返ってきたら、「どんな番組ですか」って当然キャッチボールします。逆にそれが無い人っていうのはあんまり残らないですよ。それで結果入ってくるものから、ドラマがいいと思って入ってきて、バラエティもありかなと思うとか、いい意味で迷うことはいっぱいあって然るべきだと思うんですけど、第一歩のときは何をやりたいというのはあるんじゃないですかね。

—ドラマを志向する人とバラエティを志向する人っていうのは、何かタイプが違いますか。

安島 どうなんですかね、個人差すぎて何とも言えない気がしますね。僕は自分ですごく幸せだなと思っているのは、そういうバラエティ番組を見てきて、そういう同系統の番組を作れていることはすごく幸せだなと思うんですけど。テレビ局全体で言ったら、それってむしろ少ないことかもしれないなとは思っているんです。

小仲 僕は『ひょうきん族』もすごい好きだったんですけど、『北の国から』もすごい好きで、もちろん『金八先生』もすごい好きで、録画して何度も見ていました。ただ、もの作り、テレビ作りはしたいなとは思ったんですけども、自分の志向的にはお笑いに行きたいというのがあったから、バラエティを選んだんです。でも、結局バラエティだって全部を網羅していないといけないと思いますし、コントを撮るんだったらドラマの要素も身につけていないといけないし、歌撮るんだったら歌とか。そういう意味では、そんなにドラマだ、バラエティだっていうのはなく、みんなどちらにも興味があると思いますね。ただ、昔に比べて番組作りたいていと言って入社してきている人が少なくなっているっていう感じはありますね。営業とか、事業部とか、それなりにそれが楽しいでしょうから、何か昔よりやっぱり制作現場が辛いついていう情報がちょっと喧伝されすぎて、そこに対する実は「華やかでもないんだよ」っていうのがバレているのかなっていう。

—大分バレてきていると思いますよ。

小仲 はい。だから制作現場志望が減ってきているように思いますね。

—僕も学生をテレビ局に連れて行ったときに、話している側が「新人時代、俺は月に百何十時間残業した」だとか、「1週間に1回しか家に帰らなかった」とか、彼らには楽しい経験だったんですが、若い人とはそこがずれてきているんですよ、きつとね。

小仲 そうですね。だから、まあ、積み上げていけば楽しくもなるんですけども、やっぱり帰れないとか、十分休みがないって言ったら、それは敬遠されるから、少し改善していかないと、いい人材も入ってこないんだろうなと、休みとかに関しては。

—5年後、10年後同じような状況が続いていると、ちょっと笑ってられないですよ。

安島 そうですね、自分のことはちょっとあんまり例にならないんですが、TBSさんの『ADブギ』とかを見ていて、「ギョーカイは帰れないんだ」っていうのを夢見ていましたから(笑)。僕らの世代はアナログ的な世界というか…例えば会議を3時間するとしますと、3時間いろいろ話して「この議題、こう決まりました。じゃあ、来週はこうしましょう」っていうふうに行く場合ばかりではなくて、多いのは「最近どう、面白いテレビある？」みたいな話から始まりごにょごにょ3時間たって話しても何も決まらず、「あっやばい。もう次の会議だ。じゃあ、そろそろ今日はやめて、今度の土曜日空いている人？」みたいなことをやっていて…昔はそういうことも含めてこの世界が好きの人が多かった気がします。だからさっきのその20代の社員がどうこうっていうところで言うと、今はもう、シンプルに答えをどんどん出していきたいっていう傾向はある気はしますね。大学でイマドキだけど優秀な若者が会議に出てみたら、最初しばらくどうでもいいおっさんの会話に付き合わされて立っているわけですよ。「何だよ、これ」って思うんでしょうね、多分。今は随分変わったと思いますけれどもね。午前中から会議とかね、昔はないですものね。今、朝イチで会議みたいなことありますから。そうじゃないと、みんな掛け持ちで、合うスケジュールが朝10時からしかないとかですね。昔だとちょっと考えられないです。入社した頃だったら、やっぱり演出の人間が「夕方ぐらいじゃないとテンションが上がらねえな」と。今の世代だ

と「テンションって何ですか」じゃないですか？（笑）それが許されていたんで。そういうの自体がちょっと違うなっていう感じですか。

—それっていいことなのかなあ、本当に。

安島 どうなんですかね。カチっカチっ決めてスピーディーにやるほうがいいのか、ぐちゃぐちゃ悩みながらやるほうがいいのか。クオリティーに関しては、どっちがいいって、ちょっと分からないですね、はい。

3 視聴率 9.9%と10%の間

—先程、視聴率の話が出ましたけれども、私は視聴率ってとっても大事だと思うんですね。そこで番組を作るときに、視聴率や視聴者の反応は当然すごく気になると思うんですが。

小仲 多分もうそれだけを気にしていると思いますけどもね。自分のやりたいことっていうのがあって、それがどう受け取られるかっていう反応を見て、それで勉強することもありますし、その繰り返しと言うか、まずは自分のやりたいことがあって、ただそれで視聴率が伸びなかったらやっぱ見ている人の反応っていうのは気にしなきゃいけないですし、それで改善していくっていう、その繰り返しをずっと1年間やり続けているっていう感覚ですけどね。

—今回、視聴率についていろいろ質問していて、その中でちょっと面白かったのは「番組の評判がよくても視聴率が悪ければ悔しくなる」という設問に、大体みんな「イエス」「そう思う」と答えていました。一方、「番組の評判が悪くても視聴率がよければそれでよい」という設問に、「そうではない」「賛成はしない」という回答があったのですが、視聴率に対してみなさん、複雑な気持ちをお持ちのようですが。

安島 そうですね。テレビに入って番組を作りたいと考えている人って、まずみんなに見てほしいからテレビというメディアでやっているんで、そう考えると、評判がよくても数字が悪ければ嫌ですね。マイナーだけど、すごく評判がいいんだみたいなことをやりたいわけではない。けれども、自分の中のどこかでマイナーだと思っているものが、みんなに受け入れられたらもっとハッピーだということは多分みんなあって。評判もいいし、数字がいい、というのがベストですね。

—視聴率に関しては、ディレクターとプロデューサーでは随分違って、プロデューサーのほうがかなり気にしているんですかね。

安島 どうですか、ディレクターももちろん気にしているんじゃないですか。

小仲 比較で言ったら、多分バラエティだったら、ディレクターの方が気にしているのでは。一緒じゃないですかね。それは気にしますね。

堀之内 連続ドラマの場合、その回のできと視聴率が必ずしもリンクしない場合もあるのかなと思います。もし自分が演出をしていて、自分の回の時の視聴率が悪くて次の回がよかった場合、「自分の回が面白かったから、次の回がよかったんじゃないか」と思ってしま

うんじゃないかと。勿論その逆もあると思いますし。

—それはやっぱり気になりますか。

堀之内 ドラマではやはり気にしますね。ただ、NHKの場合、昔よりずいぶん気にするようになったと言われてはいますが、やはり民放さんほどシビアではないと思います。目標が10%で結果が9.9%だったからといって、うちではその0.1%はそんなに問題にはならないと思います。

大江 視聴率はやっぱり、気にすることは気にしますよね。朝、視聴率が出たら、毎分の推移とか、あと階層別などの全部のパターンを見ても、前回からどこの階層が逃げたとかかっていうのも全部考えて、その週放送予定の完パケがすでに納品されていても、ちょっと直そう！っていう努力は、どこの民放でもあることですし。うちの場合、自分の担当した番組のノルマ視聴率というか、その枠の目標視聴率がありますから、そこをクリアできなかったら、自分の個人評価に全部かかわってきますね。自分の評価シートには達成率みたいな数値が出ていますし、まあ、どの番組に就いたかっていう運の部分も結構あるんですけど。あとは個人の評価というよりも、本当にその9.9%と10.0%では違いますね。例えば、次にスペシャルドラマがやることが決まりそうだったのに、9.9%だったから無くなったとか、そういう次へ繋がっていく話とかビジネスやキャストとの関係性にも大きく関わってくるんで、9.9%と10.0%の間の0.1%っていうのはものすごく大きいんです。せつかくキャスト・スタッフ皆で苦しい思いもして、面白いものが出来たら、一人でも多くの人に見てほしいし、次に繋げたいじゃないですか？だから、あとあと後悔しないように、0.1%でも上げる努力を放送ギリギリまでやろうと、多分、民放のディレクターもプロデューサーも含めて、みんなそういう意識でやっていると思います。

—「視聴率は信用ならない」とか「視聴率がないほうがいい番組ができる」という質問もしていて、割と民放よりもNHKの人たちのほうが視聴率に対してネガティブなんですけれども、民放の中では日本テレビとかTBSは割と視聴率を否定しないんですが、逆にテレビ東京が飛び抜けてその視聴率に対して「信用ならない」とか、「視聴率がないほうがいい」とかいう結果があるんですが。

渡辺 多分悔しさの度合いが違うんじゃないかなって思います。9%とか10.0%が目安の他局と、僕らだと8.0%とかだったりするんで、深夜だったら3%だったりするし。それで600世帯の誤差率とか考えると、やっぱり数字が小さいほうが誤差が出やすくなってしまいますので、多分フジテレビとかとは視聴率のとらえ方が違うんじゃないのかなと思いますけれどもね。

小仲 信用できないと言うか、潜在意識の中でいわゆるF2、F3とか、高齢の方々の数字が全体の世帯視聴率に大きく反映しているみたいな話ってよくあって、何となく若い人向けに作っていきたいという意識が、多分僕もそうなんですけれどもフジテレビにあって、そういう意味だとちょっと不利だなって思っているというのは、すごくあると思いますね。「なんでもっとキッズ・ティーンとか若い層に反映しないんだろう」って。

—フジテレビの場合、割とその他の民放よりも若者をターゲットにしようという社の方針というか、そういうのがあるということですか。

小仲 社の方針も多分そうだと思いますね。あと DNA 的な、やっぱり先輩がそうだったからというのがありますし、自覚もありますね。他局のことはちょっと分からないですけど。—安島さんの場合、例えば視聴者層や、年齢層、性別などは、どのくらい意識なさるんですか。

安島 僕個人としては意識しているんですが、じゃあ、例えば F3 というのはこういうのが好きでしょうっていうのはあくまで分析であり推測ですから本当に正しいかは分かりません。ただ、その人たちがテレビの前で、これを面白いと思ってくれるかなっていうのは当然考えます。だからそういう意味でいうと、誰が見ているのかなというのをずっと考えてはいますし、個人的にはやっぱり若い人にテレビを見てほしい。これからもずっとテレビっていうものが楽しいメディアでいてほしいですから。

堀之内 NHK は、若者に見てもらえるかどうか死活的問題だととらえています。というのも、昔は信じられていた話があって、それは「若い時に NHK を見ていなくても、みんな年齢が上がっていけば NHK を見るようになるものだ」というものだったんです。しかし実際に年月がたってみたら「若い時に NHK を見ない人は、年をとってもやっぱり NHK を見ない」っていうことがだんだん分かってきたんですね。「やっぱり若いときから見てもらわないとだめなんだ」ということで、ここ数年若い子向けの番組がすごく増えていますし、若い人に見てもらおうための努力というのは全局的にやっていますね。

—視聴率については、「あれ、前だったらこれで 15% ぐらい取れていたのに」というように変化している感じはないですか。

小仲 そうですね。そこに対するクエスチョンマークは何となくありますよね。視聴率の出方が変わってきているっていう。かといって若い人だけじゃないのは分かっていますし、高齢化社会なんで若い人に向けているんだけど、やっぱりそれでも高齢の方々にも伝わるような努力というか、やりたいことは変えないけども、伝える努力というのはいらないっていう、みんな認識ですけど。

4 BPO について

—調査では、こちらが予想していたよりも BPO に対してすごく好意的な回答が出ました。

「BPO は放送界にとって必要な組織だ」という設問に対し、8 割以上の方が「そう思う」と答えていたり、BPO の「委員会が出した意見書が番組作りの参考になる」という人が 6 割以上いたりとか。そのあたりについてうかがいたいのですが。

小仲 最初、BPO がどんな組織か分からないときに、いきなり新聞に「BPO により『ネブなげ』終了」という記事が出て、そんなイメージだったんです。僕らとして他局ですけどあの番組面白いと思ってたし、何か規制する機関だという悪いイメージがありました。

今になるとすごくこういう意見書とか、あとアンケートとかもお互い「ウイン・ウイン」になるための機関なんですというインフォメーションしてもらっているんで、みんなも警戒心も解いてきていると思うんですね。(上司の)片岡さんや港浩一局長とか小須田和彦局次長とかが、「敵じゃないんだよ」っていうインフォメーションを社内で流しているんで、「ああ、そういう監視機関じゃないんだ」というか、もちろん監視している部分もあると思うんですけども。

—割と年代差があって、若い人はあんまり BPO を好ましくないと見ていて、年齢が上がるとだんだん見方が柔らかくなって、好意的になっていくような傾向もありました。

小仲 それはあると思いますよ。若い頃は、結構やっちゃいけないことをやりたがるっていうのはあるから、怒られることをやりたいっていうのがありますから。年次が進んでいくと、ある程度妥協していくんだと思いますけど。でもやっぱり「敵じゃないんだよ」っていうのを教えてもらっておいたほうが、若い人も心を解くんじゃないのかなと思います。

安島 現場の番組制作者が常に BPO と向き合っているわけではないですからね。やっぱりある程度番組を背負った人間が初めて向き合うところというか、チームプレーで番組って作っているものなので、下の人間は上に判断を仰いでいく立場ですし、上の人間は小仲さんおっしゃるように、「あっ、そういうことなんだな」って分かってきているから。その先程おっしゃった敵意っていうのが下がってきている理由は、まだ下の人間というのは BPO と向き合っていないですから、イメージで判断しているんじゃないですかね。それがそういう結果なのかなという気がします。

中井 お二人がおっしゃったとおりだと思います。若い制作者は無茶もやってみたいし、それがテレビ制作の醍醐味だと感じる部分はもちろんあると思います。だから「BPO が」「放送倫理が」と言われて「そんなこと今まで言ってないじゃん」という葛藤に挟まれる。だから BPO に対してあまりいい印象ではないかもしれませんが、もちろん敵ではないし、品質を保つためには、BPO の意見も貴重だと思います。



中井 芳彦

TBSテレビ 1978年生まれ
担当番組『新参者』『JIN-仁-』(ともに協力プロデューサー)

大江 僕も、何かお世話になることがあるとしたら怒られるときかなっていうのが漠然としたイメージではあるんですが、幸い今のところお世話になったことがありませんので(笑)。でも、そういう機関のあることは必要なことですし、規制とかでがんじからめになるわけではないですから。ただ、いろんな方面からやっちゃいけない事っていうのがどんどん増えていってきている環境下で、それが何か画一的な番組、どこも同じような番組にならないように、という希望はありますけれども。

渡辺 放送倫理の部分に関してはすごくためになるな、参考になるなっていうのはあるんですけども。番組向上という部分にまだあまり接したことがないので。今回こういう会を作ってもらって、まさに今おっしゃった制作者の顔が見えるというのはすごい張り合い

があって、「ああ、この人こうやっているんだ」とか、やっぱり同じ人間が作っているんだなと思うことあるんですけども。うちの局に限って言えば、倫理的な事例が多かったせいがあるかと思うんですけど、「責任があるんだな、放送するのは」っていうのをすごく痛感させられる。それをうまく伝えてくれる機関なんじゃないかなと思っていますけどね。

堀之内 NHKには自社の中でもそういう倫理機関みたいなのがあって、チェックしているんですけど、それでも実際放送したものにBPOから指摘があったりする。内部的な価値観から距離をおいたところから意見をもらえるので、すごく大事なところだと思っています。

5 テレビ制作者のいまとこれから

—おカネの面、いろいろな規制の面のお話がありました。制作者にとって、モノ作りの点で不自由な時代だと感じますか。

中井 そこに関しては特に悲観的に思っているというのではないです。楽観的かもしれないですが、その中でも面白いものを作っていきたいっていう、一縷の夢みたいなものはみなさん持っているんじゃないかなと思います。そこがテレビの面白いところだと思います。

安島 どうですかねえ。やっぱり大前提として視聴率、皆さんに見てほしいっていうところの枠の中で、いろんな方に何か言われて規制が起きるからっていう前に、それこそ震災以降、「こっちの方向ちょっと過激で俺は面白いけど、本当にみんな欲している方向かな」と一回立ち止まるんですよ。だから別に、こういう表現がダメだからやらないとか、どうこうっていう前に、これを本当にその民放のテレビバラエティとして今の視聴者が求めているんだろうかなっていう目線は一個、多分誰しも持つことかなと思って。そこで結構解決することのほうが多い気がしていますし、そうでいなきやいけないと思っています。

小仲 おカネの面でも、倫理面でも、確実に肩身が狭い思いはすごくしているんですけど、そこで悲観的になっても意味がないんで、戦ってもしょうがないところなんで。ただ、例えば「人の頭を叩いちゃだめ」って言われて、「じゃあ、叩きません」じゃなくて、叩かれる人がその前にすごい悪態ついていたたり、いろんな人に迷惑かけていたりすれば、その叩かれたことが笑いにもなるし、スカっとする笑いになるというか、だったら叩いても文句来ないだろうとか、そういうところに智慧を多分使うべきだろうなっていう気持ちではいますね。しょうがないというか、それをまたプラスに生かしていく以外にないんで、できることだと思います。

大江 予算面もそうですけど、表現方法でも昔は普通にやっていたことができなくなることはドラマの撮影だとやっぱり増えています。昔だと街中で赤灯鳴らして、パトカーが走るシーンとか撮れたけど、今は「全部CGでやってくれ」とか、「必ずシートベルトをしろ」と言われる。「銀行強盗がシートベルトして逃げるなんておかしい」と言っても、「いや、それでも」みたいなこととか、そういうのはいっぱいありますね。だから常に、そのまま

「できないから止めよう」と受けとるのか、社内の番組審査室とか法務部とか所轄の警察の方とかに相談して、合法的にできる道筋を考えると、いろいろな方法はあると思うんです。また、「こんな撮影していた」「ロケ隊のマナーが悪かった」とかっていうのが、みんな今ツイッターで発信できたりするんで、もう国民全員に監視されているみたいなのところがある。特に震災直後、放送があるんで、どうしても撮影しなければいけないけど、街中で撮影していたら「こんなときに何撮影しているんだ！」って怒られるようなこともあるし、そうしたらやっぱり脚本の設定を直して、外のシーン設定を室内に変更して、という対応もしなければいけなかったり。やっぱりそういう意味でも今はすぐにブログとかツイッターに書かれちゃうんで、周りの目の厳しさみたいなものは今まで以上に感じますね。——視聴者提供じゃないですけど、視聴者の発信手段がいろいろできてますからね。渡辺さんはいかがですか。

渡辺 何か世の中の的に、少しミスとか失言があると、もう徹底的に叩かれて、今厳しいなっているのが本音ですけど。でも、小仲さんが言うように、それはもうしょうがないんだから、その次の手を考えるっていうのが、やっぱりこのマスメディアで仕事をしている以上やらなければいけないことなんだなっていうふうに思います。

堀之内 ドラマのロケは、多分昔よりしにくくなっていると思います。大規模な人止めとかはできませんし、何をしても周りの目を気にしないといけない。震災の時の節電の雰囲気の中では、自前の発電機を使うから電力は関係なくても、ナイトシーンのロケを自粛したりしました。また、そういった規制が強くなっている一方で、視聴者からテレビが求められているクオリティーはどんどん上がってきているんですよ。特にドラマの場合、DVDやHDレコーダーが普及したことで、クオリティーの高い大作映画と同じ感覚で見られるようになってきている。制限がきつくなっている中で、より上質のものを作っていかねばならないというのは、正直きついなと思うことはありますね。



堀之内 礼二郎

NHK 1979年生まれ
主な担当番組『天地人』『ゲゲゲの女房』『坂の上の雲』『下流の宴』など
現在は4月から放送の連続テレビ小説『梅ちゃん先生』を担当

——最後に、先程大江さんが広告収入以外のいろいろな収入の道筋を立てていかなきゃならないと言われました。多様化するメディア環境の中で、5年先、10年先を見据えたとき、テレビの未来、制作者の未来をどのように考えているのでしょうか。

堀之内 コンテンツを生み出す母体としてのテレビは、今後もずっと一番であり続けられるだろうと思っています。僕はネットの番組を作っていた経験があって、「ああ、これからはネットだな」と思っていた時期もあったんですね。「ネット面白いぞ」、「テレビヤバイな」と思っていたんですが、でもその後時間がたってみても、結局ネットから生み出されてくるのはテレビのコピーやミックス、アレンジでしかない。逆にだんだんネットとテレビの融合が進んできて、ネット発の面白い企画があったら、それをテレビがどんどんしたたかに取り込んでいくようになった。視聴者の方も、最近になって「ネットかテレビ」ではな

く「ネットとテレビ」の方が楽しいんじゃないかということに気がついてきてくれているんじゃないかと思うんですね。ここ数年、存在感でネットに押されている感があるテレビですが、コンテンツを作る力で負けない限り、これからは逆に巻き返していけるんじゃないかなと思っています。

渡辺 うちの会社にも放送外収入を得るための部署がいっぱいあるんですけども、個人的にはそんなのは後付けで、面白いものを作っていれば、ドラマであれ、バラエティであれ、いい学生も入ってくるし、いいスポンサーもいっぱい来るし、まずはそっちをやるべきんじゃないのかなと思います。今までみたいに、もう単純に右肩上がりにはもうなかなかないと思うんで、智恵使っていかなければいけないと思うんですけど。うちの会社もその周りの人たちも含めてそういうために一生懸命やっているんで、5年後、10年後も、面白いものを作る作業は一緒にやっていっているんじゃないのかなっていう気はします。明確なビジョンはないですけども、この温度で、これだけの物作りをしていけば、付いて来てくれる人や、支持してくれる人はいるんじゃないかなっていう気はします。

大江 そうですね。広告外収入っていうのは、渡辺さんが言われたように、やっぱり番組パワーがあってこそ一番で、番組パワーがないといろんな展開のもの、イベントであったりグッズ作っていても、やっぱり売れないので、そういう意味ではコンテンツを作ることが一番大切なのに変わりはないと思うんです。ただ、テレビを視聴する方法っていうのは、これからまた大きく変わっていくと思います。そうすると、視聴率っていうものへの考え方も変わってくるだろうし、今ビデオリサーチとかでもいろんな視聴率の取り方っていうのをやっているんで、多分遠くない将来、CMが飛ばせないようなHDレコーダーとかがもっと普及してくれば、録画率がCMの価値に反映されたりといろいろ変わってくると思いますけどね。今、まさにビデオリサーチとかが、その辺りをどう変えていくかというシステム作りをやっているところだと聞いています。

小仲 テレビは娯楽の王様だっていう、そういう上から見下げる感じはないんですけど、最近『家政婦のミタ』っていうのが30%近く取っている。それで核家族化だとか、テレビ離れとか、ネットだとか言っているんですけど、やっぱりいいもの作ればあれだけの人が見ているということがもうすべてなんで、外の要因とかネットがどうのこうのとかいうことではないと思います。格好付けるわけではないですけど、本当は自分との戦いなんで、いいものを作れるかどうかっていう、あんまり移り気にならず、テレビマンは職人としていいものを作れば、みんながそういう仕事をして、視聴率の取り合いですから。みんなが30%取れないですけど、テレビのそういう復権みたいなものできると思うんですよね。だから、本当に30%近く取っているというのは、渡辺さんと一緒に、面白いものを作るだけだなんて、最近思います。

安島 僕も皆さんとまったく一緒なんですけど、やっぱりいろんな環境があったり、それこそ録画とかがあったりする。だから、いかに今その時間に一番点けたいエンターテインメントを作るかということじゃないですか。『家政婦のミタ』の毎分視聴率を見ると、始ま

った瞬間に、もう 30%近くにガツと行って、そこから CM の間、ほとんど下がらないよう
です。これは CM の間も視聴者がテレビの前にいるんじゃないかと。CM の間もテレビの
前でみんな待っていて、ちょっと喋りながら「今、どうだった」とかいう家族がいたり、
言いながら「あれ始まったよ」ってやっているんじゃないかっていうのを、やっぱり想像
できる。合っているか分からないですけど、そういうものをやっぱり真摯に目指すしかな
いかなと。この時間帯にチャンネルをつけたいものを突きつめていくことしかできないし、
それでいいんじゃないかというふうには思っているんですけどね。

中井 「テレビが娯楽の王様」だという意識はあまりないです。逆に東日本大震災もあつ
て感じたことは、テレビがやっぱり一番身近な存在というか、まあ王様ではないですけど、
生活の中で一番近い「家族」や「親友」にはなれるかなと思っています。同じ時間を長く
一緒に過ごす人たちが、一緒に面白がれる、楽しめるものが家の中にある、身近にある、
それがテレビだと思います。やっぱりメディアとして面白がれるのは身近だという理由も
あると思いますし。あと放送外収入だと言っても、一番真ん中にあるのは番組コンテンツ
だと思うので、それはもう皆さんと変わらずいいもの作っていかないといけないと思いま
す。

[2011年12月2日 BPOにて]